

オックスフォード大学
REES センター

バーミンガム市ステップダウン
プログラムの評価

予備的調査報告書

2017年1月

Gillian Plumridge and Judy Sebba

問い合わせ先：

Jennifer Wilkinson

Project Manager

The Rees Centre

jennifer.wilkinson@education.ox.ac.uk

目次

概要.....	3
<i>評価における主な問い</i>	3
<i>主な調査結果</i>	3
<i>結論</i>	5
<i>本プログラムの将来的発展へ向けた提言</i>	6
主要報告.....	7
背景.....	7
<i>ステップダウンの目的</i>	7
<i>評価の目的</i>	8
<i>評価デザイン</i>	8
<i>データ分析</i>	9
<i>事前の提言</i>	10
主な調査結果.....	11
<i>若者と委託の特徴</i>	13
<i>施設養育から里親養育への移動により若者が恩恵を受けたエビデンス</i>	13
<i>委託決定に対する若者の当事者意識をどの程度か</i>	17
<i>コスト削減</i>	18
<i>移行過程の後押し 及び/又は 障壁となった諸要因</i>	19
<i>中断された委託からの学び</i>	27
結論.....	29
提言.....	29
<i>計画段階中</i>	29
<i>委託中</i>	29
<i>委託終了後</i>	30
<i>評価プロセスに関する追加事項</i>	30
事例研究：若者 1.....	31
事例研究：若者 2.....	33
事例研究：若者 3.....	35

謝辞

本評価に参加している若者、里親、メンター及びソーシャルワーカーの方々に感謝する。また、バーミンガム市審議会委員、Core Assets（コアアセット）と Bridges Ventures（ブリッジズベンチャーズ）社会投資家の方々の協力が得られた成果でもある。

Rees Centre でデータ収集と分析を引き受けてくれた同僚、特に Sarah Meakings Associate Researcher の方々にも感謝する。運営事務を支援してくれた Andrea Diss、プロジェクトの進行管理を支援してくれた Jen Wilkinson と、研究デザインへ助言をいただいた Nikki Luke へ謝辞を述べたい。この報告で示す見解は、彼らのものである。

Judy Sebba and Gillian Plumridge

2017年4月

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所がオックスフォード大学 Judy Sebba 教授から許可を得て、原著:Evaluation of birmingham city council's step down programme – preliminary findings (2017)を日本語訳したものです。

日本語訳作成をご快諾いただいた Judy Sebba 教授、監訳チームで本論文をご担当いただいた福岡市こども家庭課の福井充氏、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます。

早稲田大学社会的養育研究所
所長 上鹿渡和宏

概要

ステップダウンプログラムは、バーミンガム市と Core Assets のパートナーシップで 2014 年 4 月に開始された、居住型ホームから里親委託へ若者を移動させるプロジェクトである。子どもと若者の状況改善を望む社会投資家 Bridges Ventures が出資する社会貢献型投資契約 (Social Impact Bond contract) の支援を受けている。Bridges Ventures は、バーミンガム市が対応できないサービスの追加費用を負担する。52 週間の里親委託が若者に提供されれば、Bridges Ventures は、出資したサービス費用を補い投資家への配当を生むための支払いをバーミンガム市から受け取る。

2016 年 12 月の開始時点で、ステップダウンプログラムを通じて 20 件の里親委託が行われた (19 人の若者のうち 1 人が 2 回委託された)。そのうちの 13 件が 1 年目 (2014 年 11 月から 2015 年 10 月まで) に、7 件が 2 年目 (2015 年 11 月から 2016 年 10 月まで) に行われた。

8 件がプログラムを終え、6 件 (委託 1 年目の後半の移動により再委託された事例の 2 件を含む) は現在もステップダウンによる委託が続いていた。5 件の委託は第 14 週のインタビュー前に中断された。1 件の委託は第 14 週のインタビュー後に中断された。

本報告書のデータは、調査期間中に Core Assets が収集した量的データと、若者、その養育里親、子どものソーシャルワーカーと里親支援ソーシャルワーカー及びメンター (メンターが任命されなかった場合はサポートワーカー) との 113 件のインタビューから得た情報の分析に基づくものである。

評価における主な問い

- 施設養育から里親養育へ移動することで若者が恩恵を得られるというエビデンスがあるとなれば、どのようなものか。どのような前向きな安定性と発達の向上がこの若者たちにみられたか。
- 若者は委託決定にどの程度当事者意識をもったか。
- 移行過程の後押し又は障壁となった最も重要な要因は何か。
- 本プログラムを将来的に発展させるには、どのような提言が必要か。

主な調査結果

ステップダウンプログラムの成功によって若者の生活の質が著しく向上しうることを示唆する説得力のある理由がいくつかある。(例えば、居住施設と比較して里親養育の方がより良い教育的成果が得られるとわかっている)

コスト削減

アウトカムの向上という広い意味ではコスト削減も重要である。ステップダウンを完了し (期間中又は完了後に) 居住施設に戻らない若者 1 人につき、52 週間の措置コスト削減額は 40,000 ポンド以上となり、単純計算すると次年時に 2 倍となる。それゆえ、本プログラムに参加中に 800,000 ポンド以上の節約が、プログラム卒業後にも同じような見積り額の金額が節約が期待できる。ただし、最終報告のために完全に独立した費用便益分析が行われる予定である。

安定性と発達の向上を含む、施設養育から里親養育への移動の恩恵

最初の 2 年間で、委託 20 件 (19 人の若者) のうち平均して 70% の安定率が達成された。前回の追跡調査で示されているように、ほとんどの若者が、プログラム前に経験していたよりも大きな安定性を達成したというエビデンスがある。必ずしも最初の高いレベルを保っているわけではないが、

学校の出席率が向上したといういくつかのエビデンスと、委託後すぐに積極的な活動に参加する頻度が目覚ましく増えたという強いエビデンスがある。19人の若者全体ではSDQスコア（子どもの強さと困難さアンケート）の改善はみられない。プログラム開始から5人のスコアが減少（良い変化）、6人のスコアが増加、4人は同じスコアのままだった。残りの4人はプログラム開始から今までまだスコアはない。

委託決定における若者の当事者意識

- 若者は様々な度合（積極的なプラン作りから他者が作成したプランの同意まで）で、プログラム導入の計画に関わった。関与の程度は、委託による全体的なアウトカムには影響は与えなかったようだ。
- 若者たちは里親になる可能性がある人物と会うことに関わり前向きであったが、複数（の里親候補者）を提示された若者はほとんどいなかった。
- 進捗会議での若者の役割は多様だった。いくつかの事例では、若者の参加が予定されていたにもかかわらず必ずしも毎回は招かれず、彼らの視点が表明される方法が必ずしも明確でなかった。
- 日々の生活に影響を与える決定や委託を続けるか否かを選択する決定に若者たちが当事者意識を持っているというエビデンスがあった。

移行過程の後押し 及び／又は 障壁となった諸要因

導入期

- 導入期は、里親と若者にとって、相性が合うか、委託を進めてよいかについてより多くの情報に基づく決定ができる機会となる。里親は委託開始前に行動をマネジメントする方策を考えることができ、若者は自分が望まれていると感じる委託へ移行できる。
- 言葉で情報を得ることはとても有効であり、書類上では合意に至らなかったらう委託につながったかもしれない。書面の情報について最も多かった共通の不満は、情報が古くなっているというものであった。
- 早い段階でメンターを関与させることは、若者に継続性を与えて計画段階での当事者意識を再認識してもらうことに特に有効だと思われたが、この段階でのメンターの役割は様々であり、チームの他のメンバーがそれを十分に理解しているわけではなかった。
- 委託開始前に実用的な問題（例：通学手段やパスポート取得など）を全て整理しておくことがとても重要であることを、専門家たちは振り返って提案した。

専門的な役割と支援

- 委託は、安定性と、安全で一貫した環境を提供しているとみられ、若者たちは安心感を感じていると報告した。
- 里親たちは、ふさわしいスキルを提供し、ごく最近では、本プログラムに関する多くの知識と理解を会得しているように思われた。さらに、非常に挑戦的な行動に対する里親たちの回復力と管理能力は賞賛を浴びた。緊急的な移動を除いて、措置が中断された後に、里親のスキルに関する懸念が表明されることは（内部からも外部からも）全くなかった。
- 新たに認定された里親たちは頻繁に活用され、成功してきた。こうした成功は、Attune（同調）¹グループへの里親の出席と、訓練を実践に活かす里親の力に関連していた。
- 継続中の委託におけるメンターの役割はとても重要であり、しばしば、若者だけでなく里親にとっても有益である。このことは、メンターがいない場合の委託に明白に現れる。

¹ 同調は次のような場合に生じていると説明される：養育者が自身の感情に気づいているだけでなく、子どもがどのように感じているか認識し、その認識をその子どもに伝えることができる。同調した関係性は、幼い子どもの安心と共感の両方の発達に必須の前提条件である。（Cameron & Maginn, 2008年、p. 1158, cited in Caw with Sebba, 2013年、p. 72, Team Parenting. London: JKP.）

- セラピストの役割もまた重要であり、里親に助言と安心感を与え、チームが若者の行動について相互理解を深めるのを助ける。
- 里親たちは十分に支援されていると感じ、このおかげで、標準的な委託としては関わろうとしなかったであろう委託にも対応するようになった。

諸問題への解決策を共有・提供する専門家たちの協働

- 委託全体を通じ、進捗会議が様々に活用された。いくつかのチームは他のチームよりも積極的に活用し、これが良いアウトカムに結びついた。
- 子どもや理想的にはその家族のことを一貫して知る自治体のソーシャルワーカーが関与することは、問題がいつ起こるか予測する上でも、チームが若者を褒めて自尊心を築ける段階への進展度合いを見極める上でも、非常に有用であった。

若者の支援

- 安定性及び安全で一貫した環境が提供される委託において、若者は十分に支援を受けた。チームの支援により、里親たちは若者に粘り強く対処し、以前よりも長く委託にとどまった若者がいたことも報告された。
- 良い関係を維持し、家族の一員であるという感覚をもつことが、若者が彼らの委託に労力を注ぐことにつながった。周囲にチームがいることで、若者は、彼らを気にかけて彼らの成功を見守りたいと望む人たちがいると感じることができた。積極的な活動への参加は、自尊心とレジリエンスの形成に寄与した。
- 転校はネガティブな影響を及ぼすこともあれば、前向きに作用することもあった（学校が新たなスタートの場になるとみなされた場合）。しかし、不登校は、解決しがたく、委託を中断する要因になりえるとみなされた。積極的に活動したチームは、教育に対する若者の考え方にポジティブな影響を与えることができた。
- 学校とのコミュニケーションはほぼ良好であり、学校の進捗会議への出席は前向きなものと思えられた。

結論

インタビューを受けた人たちの本プログラムへの反応は、その役割にかかわらず、概して非常にポジティブなものであった。委託の安定性は平均して向上しており、現在までに行われた 20 件の委託の 70% が安定したままである。本プログラムを離脱した里親はいなかった。若者たちは、以前の施設措置の時よりもはるかに高いレベルの活動に参加している。本プログラムは、若者たちに個別の支援を提供し、里親を上手くサポートすることで、インタビューを受けてくれた人たちが通常の委託では上手くいかなかったであろうと思われた委託を維持することができたと考えられた。

また、「書類上」は「委託が難しい」ように見える若者たちが、ステップダウンプログラム（Step Down Programme）を通して委託されている可能性もある。若者たちがどれだけ前向きに里親たちに会い段階的に委託へ移行したかについて、里親養育サービス全般にとって強いメッセージがある。

本プログラムの将来的発展へ向けた提言

計画段階中

- 自治体職員の誰かが早い段階でいつでも委託に同意して速やかに導入できるようにしておくことは極めて重要である。
- 計画段階で情報を口頭で伝える機会を増やし、若者に会う前に入手可能な全ての情報を里親が確実に手に入れられるようにする。
- 委託の開始前に、全ての実務的な詳細（例：通学手段やパスポート申請）が合意され対処されていることを確認する。
- メンターやサポートワーカーを付けないという依頼については慎重に検討し、措置するソーシャルワーカーがメンターやサポートワーカーの役割の潜在的な利点を確実に認識できるようにする。メンターやサポートワーカーを付けない初回の合意がある場合は、後日これを見直すことができる。

委託中

- ステップダウンプログラムにおいて委託先の移動がある場合、新しい里親が本プログラムについて十分な情報を得られるよう徹底する。
- ステップダウンの委託期間中に子どものソーシャルワーカーの変更がある時は、新しいソーシャルワーカーが本プログラムについて十分な情報を得られるよう徹底する。
- 新たに承認された里親が訓練を実践に移せるよう支援し続け、里親が Attune（同調）グループへ参加するよう奨励し、サポートを求めやすいと感じられるようにする。
- 特に進捗会議への専門家たちの関与の観点から、関わる全ての専門家の中でメンターの役割の理解が一貫するようにする。
- メンターが受けるスーパーヴィジョンについて、メンターがプログラム・マネージャーにフィードバックする機会を設ける。
- データ収集と支援提供の両方に関して、学校がいかに十分に関与できるかを検討する。
- 進捗会議における若者の関与について、若者が不在の場合にその意見がどのように表明されるかを含む明確なガイダンスが必要とされる。
- 委託がよりスムーズに行われている場合は特に、チームは、進捗会議をさらに積極的に利用できるか検討するべきである。

委託終了後

- 委託が 52 週目になる前に、継続的な支援パッケージに上手く合意する。

主要報告

背景

ステップダウンプログラムは、バーミンガム市と Core Assets のパートナーシップで 2014 年 4 月に開始された、居住型ホームから里親委託へ若者を移動させるプロジェクトである。子どもと若者の状況改善を望む社会投資家 Bridges Ventures が出資する社会貢献型投資契約 (Social Impact Bond contract) の支援を受けている。Bridges Ventures は、バーミンガム市が対応できないサービスの追加費用を負担する。52 週間の里親委託が若者に提供されれば、Bridges Ventures は、出資したサービス費用を補い投資家への配当を生むための支払いをバーミンガム市から受け取る。

ステップダウンの目的

ステップダウンプログラムの目的は、52 週間後の委託の安定性という重要な成果が得られるように若者が施設養育から専門的な里親養育へ移るのを支援することである、と Core Assets が定義している。本プログラムでは、入念に練られたマッチング・プロセスと、計画されたレスパイトケアを含む高レベルの支援が行われる。それは次の 4 段階に分けられる。

1. 計画 (最長 6 週間) マッチングと計画のプロセス
若者のニーズを特定し、里親の経験、スキル、個人的資質とマッチングさせ、専門家のネットワークを若者の周囲に作り上げる。
2. 安定化 (13 週間) 隔週の進捗会議
若者は、里親家族の中で心地良さを感じられるよう支援される。若者との緊密な協働のもと、教育、個人的成長計画又は雇用が明確にされる。家族との関係と交流はきめ細かく仲介される。
3. 委託 (13 週間) 毎月の進捗会議
若者に温もり、安心感と将来的見通しを提供することを目的とする。この段階は、専門家の緊密なネットワークによってサポートされる。
4. 維持管理 (26 週間) 毎月 の進捗会議
若者のニーズを満たし、向上心を引き出し、感情面のレジリエンスを形成しながら、育成と同調ケアを提供し続けることをめざす。

先行するエビデンスは、里親養育を受ける若者の方が、施設養育²の若者以上に良い成果を得られることを示唆している。自治体にとっては、若者 1 人がプログラムを修了するのに 35,000 ポンドほどかかる施設養育に比べ、かなりのコスト削減可能性がある。翌年には、その差は倍になる。

² Sebba, J. Berridge, D. Luke, N. Fletcher, J. Bell, K. Strand, S. Thomas, S. Sinclair, I. Higgins, A. (2015). The Educational Progress of Looked After Children in England: Linking Care and Educational Data. Rees Centre, University of Oxford, University of Bristol (イングランドの社会的養護児童の教育過程: 関連ケアと教育データ。Rees Centre、オックスフォード大学、ブリストル大学 (2015 年))

評価の目的

評価の目的は、若者が居住型ホームから安定した里親養育に上手く移行することをプロジェクトが支援できているか、どのように支援しているかを、少なくとも1年間、調査することである。また、この移行を実施し、安定させ、持続させるにあたり、何が功を奏し、何が功を奏しにくいのか、若者にとってどのような成果が得られたかを検討することである。

この報告書の主な焦点はプログラムの2年目にある。これまでに里親委託された20件のうち18件は、2年目にはどこかの時点で委託されていた。評価のための主要な質問は以下のとおりである。

- 里親養育をするために転居することで若者は恩恵を得られるというエビデンスがあれば、それはどのようなものか。どのような前向きな安定性と発達の向上がこの若者たちにみられたか。
- 若者は委託決定にどの程度当事者意識をもったか。
- 移行過程の後押し又は障壁となった最も重要な要因は何か。
- 本プログラムを将来的に発展させるには、どのような提言が必要か。

評価デザイン

評価は、サービス提供を通じて収集された量的なデータと質的なインタビューデータを組み合わせたものである。

質的データの収集

委託後14週と45週に、若者と里親（対面）、児童ソーシャルワーカー、里親支援ソーシャルワーカー及びメンター（電話）に半構造化インタビューが行われた。若者が委託にとどまった場合、これら全ての関係者へのインタビューが試みられた。委託が中断された場合、里親とソーシャルワーカー2名へのインタビューが電話で実施された。

量的データ

評価には次のデータが使われた。

- 委託期間
- 里親の安定
- 失踪事案
- 学校への出席
- 学校から除籍（停学等）
- 積極的活動への参加
- 違法行為
- オフステッドの幸福尺度（2年目には除外）
- 生徒の自己評価と学校からの評価（Pupil Assessment of Self & School、PASS）
- 学業成績と進展
- 行動と情緒のウェルビーイング（SDQスコアで示される）

SDQ、幸福尺度及びPASSは、ベースラインを提示するために計画と導入の段階に行われ、その後、委託期間中に定期的（およそ4か月ごと）に行われた。その他のデータは継続的に評価され、委託日の12か月前のデータも遡って取得された。これらのデータは、Core Assetsが個人の軌跡とプログラム全体の成果を描き出すために使用された。

2年目（2016年11月～2017年11月）は、オフステッドの幸福尺度に代えて、Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ)に若者が回答した。前者が、現在の考えや出来事に影響を受けすぎることがわかったためである。

データ分析

インタビューの記録は、回答者間の相互比較、量的データ（例：逃避行動、違法行為、学校の出席と成績）の分析とのトライアングレーション（三角測量的な手続き）で評価され、個人レベルとグループ全体の両方で、データを相互に参照し、比較することができた。

倫理

評価のための倫理的な許可はオックスフォード大学とバーミンガム市から与えられた。インタビューは同意を得て録音し、録音記録は文字起こし後に破棄された。若者、里親、メンター、ソーシャルワーカー向けの情報シートと同意書は、インタビュー対象者に事前に渡し、質問がないか尋ねた。1989年児童法（Children Act 1989）第20条による委託（すなわち親同意に基づく措置）の場合は、親にも情報シートを渡し、同意書の提出を求めた。

研究目的は開始当初に全ての参加者に明確に伝えられ、研究チームの連絡先が提示された。不安の兆候がみられた場合、参加者の同意を得てさらなる支援を受けられるよう速やかに里親及び/又はソーシャルワーカーたちに依頼することになるが、これまでのところその必要はない。参加者には、いつでも同意撤回の権利があることが明示された。参加者の情報秘匿と匿名性を確保するための可能な限り全ての対策が講じられた。自治体名又は個人が特定されうることが一切口外されず、記述されなかった。若者により証言され開示されたことを通じて若者への深刻な被害のリスクが生じた場合にのみ、匿名性が破棄され、承認された自治体の責任者に通知されることが、参加する全ての若者に伝えられた。

録音音声は安全な大学のサーバーに保存する、参加者たちに匿名のコードを付し、他の識別情報とは別に保管する、広く公開された資料から識別可能性のある情報を削除する（したがってDPAに準拠している）ことで、全てのデータは機密性を保っている。

事前の提言

事前の提言事項の進捗状況を以下に概説するが、全ては報告書の関連項目でより詳細に検討されている。

1. 意思決定プロセスへの若者の関与を継続、拡大し、「地元」の地区やその近くに委託されることに伴う高いリスクによって潜在的な葛藤を抱える場合、若者との十分な話し合いが必要である。

導入期には全ての若者が計画に関与したが、計画に同意する程度から積極的に貢献する程度まで幅広いバリエーションがみられた。2年目には、ウエストミッドランズ (West Midlands) 州外への新規の委託はなかった。若者が家族から遠く離れすぎているといった問題は生じず、主な問題は転校を余儀なくされることであった。

2. スタッフの不在、離職、交代については、計画と準備の段階が損なわれないよう、また、若者と里親の両者へ代替となる支援が引き続き維持されるよう、計画に織り込まれる必要がある。

最近の委託では、スタッフの不在による計画段階での遅延に伴う一定の困難が未だに生じており、これは若者の不安を引き起こすと報告された。初期段階では、導入をすぐに開始できるよう、自治体の誰かが常に委託に同意できる状態にあることが絶対的に重要である。

3. 委託に先立って里親に提供される情報が十分に詳細なものであることを確実にする。

提供する情報は常に変化し、最大の問題は情報が古くなることであるが、最近になって改善されてきたという指摘もある。

4. セラピストからの支援は特に里親にとって不可欠であり、維持されるべきである。同様に、定期的なチームペアレンティング会議は、プログラムの成功に欠かすことができない。

セラピストは、里親たちを支援し、また、時折チームに助言する価値ある役割を果たし続けてきた。進捗会議は、委託ごとに多様に利用され、一部ではより前向きに作用した。

5. 自治体のソーシャルワーカーは、若者が十分に支援されていると感じられるよう、より緊密に他の専門家たちと関わる必要がある。

自治体のソーシャルワーカーの頻繁な交代と委託に十分に関与していないことに継続的な懸念があるが、同時に、チームに非常に前向きに貢献する児童のソーシャルワーカーに関する報告も寄せられている。

主な調査結果

2016年12月の開始時点において、ステップダウンプログラムを通じて20件の委託が行われた（19人の若者のうち1人が2回委託された）。そのうち13件が1年目（2014年11月から2015年10月まで）に、7件が2年目（2015年11月から2016年10月まで）に行われた。

8件が里親委託解除（7件は最初に委託された里親からの委託解除）となり、6件（委託1年目の後半の移動により再委託された事例の2件を含む）は現在もステップダウンによる委託が続いていた。5件の委託は第14週のインタビュー前に、1件の委託は第14週のインタビュー後に中断された。

本報告書は、ステップダウンプログラムを通じて行われた20件の委託のうち19件（1件はまだ14週目に至っていない）に関する113件のインタビューから得たデータの分析に基づいており、19人の若者から得られた量的データによって補足されている。

14週目インタビュー

14人の若者が委託14週目を迎えた。よって14週目インタビューは、インタビューを受ける人—若者、里親、里親支援ソーシャルワーカー、児童のソーシャルワーカー、メンターそれぞれにつき最大14件のインタビューに基づくものである。

45週目インタビュー

10人の若者が委託45週目を迎えた。その後に委託を再開した事例のうち1件は、45週目に「委託中断」インタビューが行われ、それはその時点で評価チームに与えられた情報に基づくものだった。よって45週目インタビューは、里親、ソーシャルワーカーらそれぞれにつき最大10件のインタビューと、若者及びメンターそれぞれにつき最大9件のインタビューに基づくものである。

委託中断インタビュー

5件の委託が14週目より前に中断となり、うち4件の委託について里親と里親支援ソーシャルワーカーへのインタビュー、3件について児童のソーシャルワーカーへのインタビューが実施された。1件の委託は14週目以後に中断となり、里親、里親支援ソーシャルワーカー、児童のソーシャルワーカーへのインタビューが行われた。

本報告書に示すデータの概要は次の表のとおり。

表1：データの概要と評価の分析 - 2016年12月

データ元	収集したデータ	コメント
量的データ	委託 20 件 (若者 19 人)、8 件委託修了、6 件中断、6 件委託中	
若者へのインタビュー	14 週目に若者 10 人のインタビュー。	3 人の若者はインタビューに参加しなかった。 1 人の親が、子がインタビューを受けるのを許可しなかった。
	45 週目に若者 6 人のインタビュー	2 人の若者がインタビューに参加しなかった。1 件の委託は、訪問した時かなり不安定な状況にあり、若者にインタビューするのは助けにならないと感じた。
児童ソーシャルワーカーへのインタビュー	14 週目に児童ソーシャルワーカー 10 人にインタビュー	4 人の児童ソーシャルワーカーとは会えなかった。
	45 週目に児童のソーシャルワーカー 8 人にインタビュー	1 人の児童ソーシャルワーカーには会えなかった。 1 人は退職し次の担当者も交代したため、現在の児童ソーシャルワーカーはこの委託について何も知らない。
里親支援ソーシャルワーカーへのインタビュー	14 週目にソーシャルワーカー 14 人にインタビュー	
	45 週目にソーシャルワーカー 10 人にインタビュー	
里親へのインタビュー	14 週目に里親 14 人にインタビュー 45 週目に里親 10 人にインタビュー	
メンターへのインタビュー	メンター 9 人へのインタビュー (うち 2 件はサポートワーカーへのインタビュー)	1 人の若者のメンターは産休中であった。 4 人の若者にはメンターが割り当てられていなかった。
	45 週目にメンター 8 人にインタビュー (うち 2 人はサポートワーカーへのインタビュー)	2 人の若者にはメンターが割り当てられていなかった。
中断された委託	児童ソーシャルワーカー 4 人 里親支援ソーシャルワーカー 5 人 里親 5 人	

若者と委託の特徴

男子の数が女子の数を上回る社会的養護人口全体とはやや対照的に、女子 11 件（うち 1 人は 2 回）と男子 9 件を含む 20 件の委託が 2014 年後半から行われた。委託時の年齢は、11 歳 9 か月から 15 歳 6 か月までと幅があり、平均年齢は 14 歳の若干手前であり、13 歳と 14 歳が多い。委託 20 件 19 人の若者のうち、12 人が白人の英国人、3 人がミックスルーツと表示され、残り 4 人がルーマニア人、黒人のカリブ人、アジア人のいずれかであった。

委託された若者たちには様々な社会的養護歴があった。過半数の若者が複数の里親委託を経験しており、それ以外の若者は比較的最近になって里親養育を受けていたか、里親が利用できず居住施設に措置されていた。一度も里親委託されたことがない若者も一人いた。

施設養育から里親養育への移動により若者が恩恵を受けたエビデンス

委託期間

表 2：ステップダウンプログラムにおける若者 19 人の委託期間

若者の人数	委託期間（月数）
9 ^{*1}	12
5 ^{*2}	5～8
5 ^{*3}	3

*1 本報告の作成時に、この若者のうちの 1 人がちょうど 12 か月目を迎えた。

*2 このうち若者 1 人は 7 か月後に委託中断して居住施設に移った。

*3 このうち若者 4 人は 3 か月で委託中断し、そのうちの 3 人は居住施設に移り、1 人は行方不明になった。

2016 年 12 月に委託中の若者 6 人のうち、4 人は同じ委託にとどまり、1 人は 2 回、もう 1 人は 6 回委託先を変えた。1 年目の報告以降、安定性の程度が少し低下していたが、この群が委託全体に占める割合は低い。

委託先からの行方不明

委託先から行方不明となった出来事の数々の平均値は 1 か月につき 2 分の 1 件に満たないが、委託の 12 か月目に増加がみられる。2 人は委託先から 10 回、1 人は 6 回、2 人は 4 回、1 人は 2 回、そして 4 人が 1 回行方不明となっていた。12 か月間での同群全体を平均すると、施設養育にいた時に取られたベースラインと比べて失踪割合は低いが、個人差が著しく、9 人は失踪のエピソードがなく、4 人は 1 回しか失踪しなかった。

学校への出席と学業的進展

12 か月間における同群の学校への平均出席率は高く、施設養育でのベースラインを上回っている。1 年目に委託開始した何人かの若者は、一時期登校しなかったが、再び学校へ行き始めた。14 人は 12 か月間を通して出席率 100%（承認された欠席は含まない）であったため、出席率のばらつきは他の 5 人の若者によるものである。多くの若者にとって学校は難しい課題であり、クラスメートとの関係が最も共通の困難だったが、行動に関する困難もまた一般的であった。家庭よりも学校において、はるかに多くの困難が生じ、何件かの委託では若者が「家庭では我慢しているが学校でそれを吐き出している」と感じていた。また、生活が大変な時、学校は「若者の最後の関心事」になってしまう。しかしながら、とりわけ若者の意欲という点では前向きな傾向もみられた。いくつかの委託では、学校は単に行かなければならない場所というよりも、目的をもったものとして教育を捉える考え方への変化がうかがわれた。若者は、ステップダウンの委託に移行してから、カレッジや大学に行きたいと考えるなど意欲を高めていった。

停学、違法行為及び懲戒処分

これは全てグループ全体の平均値であり、12 か月間で起こる割合は一貫して非常に低かった。若者 3 人がある 1 件の違法行為に関与し、1 人が 2 件の違法行為に関与した。停学データが得られた 18 人の若者のうち、5 人の若者が期限付きの停学処分を受け、そのうち 4 人は 2～6 回、1 人は 42 回停学となった。プログラムの 12 か月目に停学がやや増えたが、児童の年齢が上がるにつれて停学の割合が全国的に高くなるので、これは想定範囲内である。

積極的活動

1 か月あたりの若者 1 人の積極的な活動の平均回数は、9～12 か月目ではわずかに減少したものの、12 か月間にわたるグループ全体の平均値は優位に増加した。若者 19 人のうち、9 人は平均すると 1 か月あたり 5 回、その他の 9 人は 1 か月あたり 2～3 回、1 人は平均して 1 か月あたりわずか 1 回、積極的活動に参加した。この活動レベルは、施設養育でのベースラインの平均よりもはるかに高い。

教育に対する姿勢 (PASS)

グループ全体の平均として、生徒の自己及び学校に対する姿勢 (Pupil Attitudes to Self and School, PASS) は 1 年を通じて改善を示さなかった。しかし、これらの平均値は個人差が大きい。7 人の若者には一定の改善がみられ、1 人には著しい改善が確認できた。4 人の若者については 1 年を通して成績が悪化し、2 人は少し違いがあった。その他の者についてはデータが紛失していた。このことは、データ収集と適切な支援の両方に関して、どのように学校にさらなる関与をさせるか考慮する必要があることを示している。

積極的イベントへの参加とコミュニティとの融合

若者は広く様々な活動に関与した。多くの若者は新しいスキルを身につけたと報告し、一部の若者は、彼らが決してしたくないことや、したいと思っていたこと、例えば乗馬のような活動から単に友人との外泊といった活動に至るまで、挑戦する機会を得られたと嬉しそうに報告した。大半の若者は、休日、特別な活動に加えて、里親たちと外食したり、映画を観に行ったりといった、より日常的な活動を楽しんだ。

若者のほとんどが友人関係に苦勞したと報告されており、これは 45 週目も依然として同様であった。この背景にある理由は複雑で固定化されたものであることが多く、必ずしも瞬時に克服可能なものではないと広く認識されていた。必要に応じて、里親とサポートワーカーが、若者がクラブやチームに参加するのを支援し、それが望ましくない場合は、他の若者と一緒にはいるが交流が限定されるような活動を行うこともあった。指導者の話を聞いて応えるというだけであっても、若者は、活動状況下で交流に参加したことを褒められた。

SDQs

若者 19 人を平均すると、スタッフ又は里親の SDQ スコアは学校が付けたスコアよりも高く(悪く)、若者自身が付けたスコアが最も低い(最も問題が少ない)ものだった。同様に、社会性尺度は、若者自身が付けたスコアが、学校職員と里親いずれが付けたスコアよりも高かった(より肯定的だった)。これは、SDQs に関する比較可能な全国スコアにおける自己、学校、里親のパターンを反映している。第 3 期までに若者も里親も困難を悪化させスコアは悪くなっており、両者とも平均して有意な改善はみられない。

こうした平均データには、いくつかの重要な個人差が隠されている。本プログラムを開始した時点から、若者 5 人の SDQ スコアは下がり(肯定的になり)、6 人では上がり、4 人は変化がなかった。残りの 4 人については開始後まだスコアが得られていない。1 人の若者は、1 年を通じて全てのスコアが悪化している。他の 1 人は全て良くなったが学校に限ったことである。他の 2 人は、家庭と学校の両方の環境で感情面のスコアだけが改善している。他の 2 人は、両方の環境で行動面のスコアだけが改善し、そのうち 1 人は学校でのみ友人関係が改善している(それぞれの環境に身を置く機会の差を反映していると思われる)。これらのデータは、最終報告の中でさらに精査する価値がある。家庭あるいは学校のいずれかにおいて早めに落ち着く若者がいて、そのことが、彼のスコアに反映されている可能性がある。

精神的なウェルビーイングとレジリエンス

いくつかの委託において、自傷行為が減ったことを大人は報告したが、若者自身は、最も大きな変化は自分の怒りをマネジメントできるようになったことだと述べる傾向があった。例えば、ある若者は、施設養育にいたときは「何でも壊したい」と話していたが、ステップダウンの里親に措置されてからは怒りよりもイライラを感じ、「何かを壊したり悪いことをしたいとは思わない」と説明した。里親とソーシャルワーカーもこれに同意しており、若者がより多くの怒りを示していた施設養育の時とは時折対照的であるとした。若者にみられたその他の変化としては、落ち着いていて、幸せそうで、より寛いでおり、自信が強まった、ユーモアセンスが高まったことが観察された。

...そして、彼女の直近の LAC (Looked-After children : 社会的養護下の子ども) 審査で審査長が彼女は変化を乗り越えられないと言った時、彼女の顔はとても寛いでいました (里親)

...彼は対処法を身につけています...彼は物事をマネジメントする方法を学んでいます...彼は自分が何をしたいのか決断できるようになってきています (里親支援ソーシャルワーカー)

...彼の気分に変化がみられています。私が会いに行く時、彼は幸せそうな顔をしています (児童のソーシャルワーカー)

何人かの若者は、健康的になった、あるいは過剰な体重が減ったと報告され、このことが精神的なウェルビーイングにも前向きな影響を与えた。

彼は自分のイメージをやや変えました。彼は髪型を変えましたし、おめかししている様子で、お洒落で、いつも髪を整えています。彼は引っ越してきた時の小さくてふっくらした少年から、背が高くてスマートな少年になりました。以前は頭を上げていなかったのに、今は頭を上げるようになりました。誰もが彼の印象が変わったと言いますが、私はそう言われるのが好きです。(里親)

例えば中等学校（secondary school）を4回も変わったにもかかわらず GCSE を達成した若者の話など、自分のことと自分の成果について前向きに話ることができる若者の話を聞いたのは、特に心強いことであった。

達成したことを考えると、私は自分にとっても誇りが持てました（若者）

私は盗みもしないし、物も壊さない、... ずいぶん成長したとみんなから言われます（若者）

私はここに来たとき、ボロボロでした。今でもそれは少し残っているけど、私は変わりました... 私はもうあんなに暴力的ではない... 私の態度はゆっくり変わりつつあります（若者）

若者の安全という感覚

インタビューを受けた全ての若者が安全だと感じていると答えたが、この質問に対する解釈は様でなく、中には、委託についてというより住んでいる地域について話す若者もいた。

何人かは、施設養育の時よりも安全を感じていると明確に述べ、それは、（施設養育では）他の人が安全を感じられるよう手助けを申し出してくれる一方で、例えば「君はここでは警戒すべきだ」とも言われたからである。何人かは、限界を理解し、やってはいけないことは実際にはケアされ守られていることだと気づいたとの意見を述べた。

著しい成長が確認された若者がいた一方で、他の若者については、委託 52 週目においては委託先に落ち着くこと以上に達成されたことはほとんどないと報告された。若者の過去の経験を考慮すると、このこと自体が成果であると認識することが重要である。このような事例では、委託 1 年目で利用できなかったいくつかのサポートを委託 2 年目に利用することで恩恵が得られるのではないかとの指摘があった。

私は、これが彼女らしさだと思います。1 年目では、定着した彼女の行動を止めようとはしなかった... 始まったばかりです。私たちは1年かけてアタッチメントを築き上げた後、彼女の心理治療を開始し、彼女にもう少し自立させて、困窮しないようにしようとしています。よって、この仕事はまだ続ける必要があります。SIBS プログラムは終える予定です。（里親ソーシャルワーカー）

委託決定に対する若者の当事者意識をどの程度か

導入期

ほとんどの若者は、里親に行きたい、あるいは少なくとも施設養育から出たいと積極的に自分たちのソーシャルワーカーに話したので、彼は実質的に本計画の発案者であった。

導入期の実践面では、他人が立てた計画に同意する程度から、活動や期間の計画づくりにかなり積極的に関与する程度まで、若者の関与は様々であった。以下の引用はより積極的な関与の状況を表している。

...計画の骨格があり、彼女は「これについてどう思う?」、「それについてはどう思う?」と尋ねられました。彼女は、希望すれば自分で計画の一部を追加する機会が与えられました。彼女は、私たちと2時間の交流の後、1日の交流をもち、さらに彼女には、次回を宿泊交流にするか日中の訪問だけにするかどうかの選択権が与えられました(里親)

この違いは全体的な成果には影響していないようだが、解釈の違いを示唆している。若者の積極的な関与が少なかった委託では、彼らが求めれば計画を変えることができたし、若者が満足しない方法で関与していたという指摘はない。

里親の選択を求められた若者は非常に少なかった(1人の若者だけが、別の里親を訪問し、2人の選択肢から選んだと報告した)。

移動を強く希望するあまり、大人が「何でも賛成している」と感じてしまう若者が少なからずいるという懸念が示された。ソーシャルワーカーはこのことによく気づいていて、状況に応じて若者に注意を払おうとしたが、これは常に成功したわけではなかった。例えば、移動が転校を意味するということをソーシャルワーカーが伝えたと確信していても、若者がそのことを「聞いて」いなかった事例があった。

私たちが話を聞いた若者は、里親候補者と会うことに例外なく積極的で、彼のコメントからは、自身には選択肢があり、自分の移動について選択権がありコントロールできると理解していたことがうかがわれた。

私は(ステップダウンの申し入れがあった若者に)言いたいです。「実際に会いに行ってみればよい。私が(里親と)会ったように。さらに別の里親を頼むことにあまり気が進まなかったら、一泊お泊りを頼んでみるといいかもしれない。それで心地よかったら行けばいいし、そうでなければ誰かにそう話せばいいだけだ。」と。(若者)

里親委託は常にこのように実施されるべきだと、いくつかの若者が指摘した。

彼のために委託先をみつけてください。委託先が一度みつかったら、あなたはプロセスの中にいるのだと伝えてください。全てを彼に伝え、少し休息しましょう。それが移行の仕方というものです。慌てて彼を知らない家族の中に投げ込んではいけません。そのようなコミュニケーションを若者に提供する必要があります。(若者)

委託中

委託されてからの若者の関与も様々であった。(全て又は一部の時間の)進捗会議に出席した若者もいれば、しなかった若者もいた。それは若者本人の選択であることもあれば、招待されなかったり、特定の専門家の出席を可能とするために会議の時間と場所が設定されたことで若者の出席が現実的でない場合もあった。決定が個別性に基ついて行われるべきことは認識されていた一方、何が理想的か普遍的な理解には至っていなかったようである。例えば、いくつかの委託において、若者が会議に出席するかもしれないという考えに専門家たちは驚いたようだった。

若者が進捗会議に出席した時、その利点についての見解は様々であった。自身でコントロールできているという感覚を若者に与えられるという意見もあれば、(時として同じ委託において)圧倒されて助けにならないという意見もあった。時々あるいは会議の一部のみへの出席は、概して最も有効な選択肢だと感じられたが、会議の場所などの現実的な要素に大きく左右された。

彼女が決めることですからね。私たちは心を広げたまま、彼女が好きに出入りできるようにドアを開けておきます。最初、彼女はあまり入ってきませんでした...それから徐々に少しずつ入ってき始めて、最後の会議では、全ての時間出席していた...私は、その家が会議に適した場所だったと思う...ただ、特に彼女に聞いてほしくない話がある場合、私たちは、彼女が戻ってくる前にその話ができるよう、彼女が学校から帰ってくる少し前に会議を開くことが多かった(里親支援ソーシャルワーカー)

若者が進捗会議に参加しない場合や、自分の意見を述べるのに抵抗がある場合に、そのことが会議でどのように考慮されるかは必ずしも明確ではなかった。メンターたちは、委託についての若者の現在の意見を確かめることが自分たちの責任であるとわかっていたが、進捗会議で若者の意見を報告したとは明確に言わなかった。さらに、全ての若者にメンターがいるわけではなく、全てのメンターが進捗会議に出席したわけでも、あるいは継続して出席したわけでもなかった。

児童ソーシャルワーカーは、委託先での若者の幸せを審査するのが自分の役割だとよく言っていたが、これにはばらつきがあり、割り当てられた担当ソーシャルワーカーがいない(又はソーシャルワーカーが長期間病欠となっていた)期間がある若者もいた。

その他の点では、若者が選択権を行使する例が多くあった。これには、セラピーへの参加、レスパイト、家族交流に関する決定が含まれていた。若者は、委託から離れたいと望んだ時と、最初はそう思ったがその気持ちが変わった時は、それを知らせてくれた。担当のサポートワーカーがいる若者は、自分自身についてとても前向きに語り、若者自身が取り組みたい活動についての選択肢が明確に示された。しかし、全ての若者にサポートワーカーが付いていたわけではなく、サポートワーカーの役割が、活動を行うというより学校やセラピーへの送迎に使われている委託や時期があった。サポートワーカーやメンターが任命されなかった場合は、判断に若者が参加したという言及はなかった。

コスト削減

成果の改善という広い意味では、コスト削減も重要である。ステップダウンを完了し(委託期間中又は委託終了後)に施設養育へ戻らない若者1人につき、52週間の委託によるコスト削減の見積額は、以下の表3に示すように、40,000ポンド以上であり、通常、翌年には2倍になる。よって、今までの委託全体を通じて、800,000ポンド以上の節減があり、プログラム終了後もこれまでに同額程度の節減があったと期待できる。若者がプログラム参加中でも、卒業後まで同じような見積もりの金額が節約できる。ただし、完全に独立した対費用効果の分析は最終報告で行われる予定である。

表3：ステップダウンプログラムにおけるコスト削減の見積額

イニシャル	委託週数 ～2016年12月	週あたりの 施設養育コスト	施設養育での 総コスト	ステップダウン での総コスト	削減コスト	終了後の 削減コスト	委託日
YP 1	52	3,000.00	156,000.00	90,905.00	65,095.00	123,056.30	終了
YP 2	52	3,000.00	156,000.00	90,905.00	65,095.00	113,425.81	終了
YP 3	52	2,798.00	145,496.00	90,905.00	54,591.00	77,175.22	終了
YP 4	52	2,453.62	127,588.24	90,905.00	36,683.24	123,014.48	終了
YP 5	52	3,000.00	156,000.00	90,905.00	65,095.00	78,470.68	終了
YP 6	52	2,300.00	119,600.00	90,905.00	28,695.00	13,522.03	終了
YP 7	52	3,000.00	156,000.00	90,905.00	65,095.00	33,528.38	終了
YP 8	52	3,000.00	156,000.00	90,905.00	65,095.00	24,611.26	終了
YP 9	31	2,800.00	205,600.00	116,405.00	89,195.00	0	2015.6.5 -
YP 10	45	2,586.00	161,440.29	103,315.00	58,125.29	0	2015.8.21 -
YP 11	52	2,453.62	116,371.69	85,465.00	30,906.69	0	2015.12.4 -
YP 12	36	3,000.00	82,714.29	61,835.00	20,879.29	0	2016.4.21 -
YP 13	32	3,000.00	69,857.14	56,735.00	13,122.14	0	2016.5.21 -
YP 14	15	3,977.47	24,433.03	7,310.00	17,123.03	0	2016.9.18 -
YP 15*	27	2,500.00	67,857.14	32,300.00	35,557.14	0	2016.4.30 - 2016.11.8
YP 16	13	3,000.00	38,142.86	15,130.00	23,012.86	0	2016.7.16 - 2016.10.13
YP 17	12	2,579.49	31,690.88	14,620.00	17,070.88	0	2015.11.27 - 2016.2.21
YP 18	9	1,900.00	17,371.43	10,880.00	6,491.43	0	2015.8.30 - 2015.11.2
YP 19	13	4,995.00	64,935.00	15,470.00	49,465.00	0	2015.3.19 - 2015.6.18
合計		55,343.20 ポンド	2,053,097.98 ポンド	1,246,705.00 ポンド	806,392.98 ポンド	586,804.17 ポンド	

*委託が中断され、中断期間後にプログラム再開（再委託）となった若者

移行過程の後押し 及び／又は 障壁となった諸要因

導入期

お互いをよく知ること

インタビューを受けた全ての人が、導入期の利点について前向きな意見を述べた。その主な利点は、里親と若者にとって、互いをよく知り、マッチングと委託を進める判断についてより多くの情報を与えられる機会になったことである。このことは、空いている里親ならどこへでも委託される急な移動を多く経験した若者にとって、とりわけ重要なことだと考えられた。

里親は委託開始前に行動のマネジメント方策について検討する機会をもち、若者たちは望まれていると感じて委託へ移ったと報告された。これは、歓迎カードや、個々の若者に合った小さなプレゼントを渡す里親たちに支えられた。

私が本当に馬が好きだというのを児童ホームのスタッフが里親に伝えてくれて、そしたら、初めて私に会った時に彼らはこの *Horse & Rider* の雑誌を持ってきてくれました。私は本当に楽しんで読み、これは上手くいく委託だとわかりました。(若者)

柔軟性

インタビューを受けた人たちは、導入期間の長さの柔軟性を評価した。導入期間を短くするのは、通常は若者の希望に応えるものであったが、他の理由(例:学期前の転校)がある場合は、若者と関与する全ての専門家の同意があった。上手く管理されてさえいれば、より短い導入期間が委託にネガティブに作用したという指摘はなかった。

若者についての情報収集

受け取られた情報は、その量や特に質の点で、委託全体を通じて様々であった。最大の不満は古い情報を受け取ることだったが、情報が不正確だったり、時として情報が届くのが遅すぎるということもあった。最近の委託では改善されているという非常に暫定的な示唆もあるが、これはさらなるモニタリングが必要なことだろう。里親は、*Core Asset* と共有されている全てのことに当事者意識を感じていた。

最も強いメッセージは、居住施設と児童ソーシャルワーカーの両者から口頭で情報を受け取ることには価値を置いているということである。インタビューを受けた人たちは、特に里親とメンターは、このことがより中立的で正確な若者の姿を与えてくれると感じた。書面情報は、最新でないだけでなく、ネガティブな出来事に焦点を当て、それらの出来事が起こった時間の経過が感じられない傾向にあった。中には、書面で提供された情報のみでは委託に同意できそうにないと報告してきた里親が、対面の話し合いによって同意し、委託に成功した事例もあった。このように、本プログラムは、「書類上」は難しそうな若者の委託を促進しているようだ。

里親の中には、自分が委託に進まないと決める場合とても罪悪感を覚えるというジレンマの中であり、若者に会う前にもっと十分な情報が提供されるべきだと感じた者もいた。

言葉情報の強みに基づいて上記のようなポジティブな委託が行われたことを考えると、委託先の候補について若者が知らされるより前の早い段階で対面で情報を共有することの重要性が支持されている。

マッチング

インタビューを受けた人たちは、マッチングについて概ね肯定的であり、このプロセスが前向きな委託に貢献していると感じていた。導入時に希望した委託先と異なる委託が行われた事例はごくわずかであったことがインタビューから示された。本プログラムで若者の初回の委託が中断された1つの事例では、自治体のソーシャルワーカーは(里親の関連する経験とスキルの観点から)マッチングに疑問を呈したが、これは後になって判断されたことであった。若者はそのロケーションに不満をもっていたが、マッチング自体は肯定的に捉えられていた。

専門家による関与

いくつかの事例では、導入期は本来可能なほど上手くは調整されていなかった。これは大抵、専門家の関与を得るのが難しかったことが原因であった。コミュニケーションが上手くいかなかったために、ある若者は同意する前に里親のプロフィールを見ることになり、また別の若者はLAC (Looked-After Children) 審査時に偶然にも里親になりうる人物のプロフィールを見ることとなった。この段階で「いなくなる」ことの多い専門家が児童ソーシャルワーカーであった。これには長期間の病欠といった理由があることが多いが、結果的には対応が遅れ、ある事例では、若者が委託されるまで、その委託がステップダウンプログラムの一部であることを措置担当ソーシャルワーカーが知らなかった。里親支援ソーシャルワーカーは、これは標準的な委託に共通する経験であるとし、ステップダウンの委託ではセラピーやその他の支援が既に合意されているので、ある意味で問題になりにくいと指摘した。

セラピストの役割は様々で、若者が移行する前に里親の支援に関わっていたり、少なくとも会議で里親や若者と会っていた事例もあれば、若者が委託されるまでセラピストが選定されていなかった事例もあった。セラピストが早期に関与した場合、里親は、行動マネジメント戦略に向けて話し合い、計画を立てる機会を得られた。

導入期におけるメンターの役割

若者が委託に移る数週間前に若者と会うメンターもいれば、委託されるまで面談しないメンターもいて、様々だった。メンターが早い段階で若者と面談した場合、これは互いの関係を発展させ、若者が委託プロセスの当事者であるという安心感を与えることができるため、有益だと考えられた。

...彼はこの人たちと一緒に住む必要はありません。彼がしたくなければ、お茶を飲みに出かけたり、他の似たようなことをする必要もありません。私は、この状況を自分でコントロールする力があることを彼に知ってもらいたかったのです。(メンター)

早めに会うことは若者に継続性も提供した。若者が居住施設から里親に移ると同時に転校しなければならぬ場合、このことは重要であった。家族との交流が限られている若者は特に、こうした移動について話す相手や喜びを分かち合う相手すらいないと指摘されていたからだ。

いくつかの事例では、この段階で、メンターは他の専門家からの孤立を感じ、チームの残りのメンバーとより多く接触することを大切にした。自治体のソーシャルワーカーは、メンターの役割と行動について必ずしも承知しているわけではなかった。

綿密な計画の重要性

いくつかの委託では、書類を待ち続ける（特にパスポート。これがないと若者が休暇をとれず、又は家族と休日を過ごせなくなってレスパイトに置かれることになる。）、学校への通学手段が手配されていないといった問題もあった。その後インタビューを受けた人たちは、委託の最終合意の前にこうした問題を確実に解消しておく重要性を強調した。

専門家の役割と支援

本プログラムを提供するために適切に訓練された里親の配置

ほとんど全ての事例において、インタビューを受けた人たち、特に児童ソーシャルワーカーは顕著に、里親による提供スキルのレベルに非常に満足していた。里親は、ステップダウンの委託のための準備がよくできていると感じており、最近の委託では、プログラムについてより多くの知識と理解をもっているようであった。委託が（プログラム期間中に又は完全に）中断されたごく少数の事例において、児童ソーシャルワーカーは、特にティーンエイジャーの養育に関連して、里親の経験と能力に懸念を示した。しかし、これは事後的な見方によるものであり、緊急を要する状況でステップダウンプログラムが新規に承認した里親の元へ移った一人の若者の事例を除き、これらのソーシャルワーカーや同僚は、十分な情報に基づいて若者を最初の里親に委託する決定を行っていた。

新規に承認された里親は、このプログラムの中で頻繁に活用され、何人かの児童ソーシャルワーカーが驚きと懸念を示したが、全体としては成功を示した。終了した委託8件のうちの3件は新規に承認された里親に委託されていた。（1件の事例では若者は何回かレスパイトを経験した。）

ソーシャルワーカーは、新規に承認された里親について当初は動揺することがあったが、実際には、その里親たちの熱意と新鮮なアプローチのバランス、受けられた追加支援により、プログラムに有効な里親を生み出してきたと感じていた。新規に承認された里親が成功したのは、訓練を実践に移す能力に関連しており、特に、同調（心理治療的な）トレーニングプログラムへの参加が有益だったと述べられた。インタビューを受けた、新規に承認された里親の中には、まだ包括的なトレーニングをさほど受けていなかったと語った者もいた。

私は、当初はおそらく断っていたと思います... [しかし] このSIBパッケージでは、全ての支援を受けることができます。だから、新規の里親にとっては、追加的なスーパーヴィジョンが受けられ、サポートワーカーを得ることができ、教育ワーカーも得られる。彼らが必要なら多くを得ることができ。よって、様々な意味で、大きな利益がある...進行するにつれ、実際に彼らは学び、経験を積むことができる。そのためには心を開いておくことが大切だと思います...。(里親支援ソーシャルワーカー)

新規の里親を迎える時、彼らは物事について新しい視点を持っているかもしれないと時々思います。それを否定的に捉える人もいますが、私はかなり前向きに捉えました...新しい考え方や新しいやり方としても捉え、それらは私の心を引きつけました。(児童ソーシャルワーカー)

ソーシャルワーカーは、より経験豊富な里親にも好意的で、そうした里親は特に回復力があり、自傷行為やその他の精神的な問題に動じず、とても困難な行動にも対処できると述べていた。しかしながら、時として彼らは行動の背景にある原因に関する理解が不足しているとみられ、これについてさらなる支援が必要だと思われた。

現行の委託におけるメンターの役割について

メンターが関与している場合、彼らは委託においてとても重要な役割を果たしていると考えられていた。若者たちは、(直接的に又は間接的に)メンターと良い関係を築き、彼らに会うのを楽しんでいると報告された。里親らとソーシャルワーカーらが報告したところによると、メンターは、養育の経験を分かち合う存在であるだけでなく、ソーシャルワーカーやセラピストとは違う立場で若者たちを理解する役割を果たしたため、より寛いものであるとあり、他の人とは話し合わないであろう問題を話し合えると若者が感じたということである。

...あなたは決して彼ら(メンター)が感じているような気持にはなれないでしょう。それが[メンター]が素晴らしい理由です。なぜなら、彼女は行動し、隣に座って「私は何が起きているかわかっている」と言うことができるからです。しかし、あなたは前に進む必要がある(里親)

メンターは直接的に、例えば、若者が自分の行動と家族についての感情を理解するのを後押しし、経験を共有することにより、若者を手助けした。しかし、いくつかの委託では里親にとって重要な支援的役割を担っているともみなされていた。彼らは時折、問題や誤解を解決するために仲立ちをして里親や若者と協働し、具体的な行動をマネジメントする戦略を里親に提供することができた。ある若者は、彼女にとってメンターは「とても」重要であったと言い、ある里親は、メンターは若者に「常に何を言うべきかわかっていた」と述べた。

こうした非常に前向きなイメージは、メンターが配置されていなかった委託(14週目に達した若者14人のうち6人)に影響を与えた。この判断をするのは自治体であることが多かったが、メンターの役割の一般的な利点に加えて、この中の特定の若者の何人かにメンターがいれば利点があったかもしれないことが示唆された。それは、里親が若者が機会を逃していると感じたから、又は彼らが自身へのそのような支援を希望したからであった。

私は、もっと自分で生きているような、ケアから出て自立して生活しているような人について知りたかったのです。私は、彼らにたくさん質問をしたいと思いました。あなたはどうしたんですか。あなたは知っているんですか。そろそろケアリーバーになる時期が近づいているので、私には今たくさん質問があります。ソーシャルワーカーに聞くのと経験のある人に聞くのとでは違いますからね。だから、私は、ケアから離れ、自分自身の部屋で暮らしている人にぜひ尋ねてみたいんです...(若者)

チーム全体へのメンターの関与は委託によって様々であり、非常に関与している場合もあったが、進捗状況を確認する会議に呼ばれないなど孤独を感じている場合もあった。このことは、彼ら／彼女らが共通の目標に向かって取り組むのを難しくした。

メンターは、インタビューで、提供されたスーパーヴィジョンはとても役に立ったが、その形式はプログラム期間を通じて様々だったと報告した。治療的なスーパーヴィジョンが提供された際にそれがとても役立つとわかったという人もいた。その後、省察的実践 (reflective practise) アプローチがメンターの関与を高めるかを確認するために提供方法が変えられたこと、その後のメンターのスーパーヴィジョンを提供したのが資格を持ったソーシャルワーカーだったことが知らされた。

メンターがより深く関与するようになり、この2年目を通じて価値を高めたという意見があったが、同時に、異なる提供機関 (すなわち、FCA、ACS、又は里親) が提供する委託においては作用の仕方に違いがあるという意見もあった。

セラピ어의役割

セラピストの役割もまた非常に重要であり、里親は彼らに支えられていると感じていた。セラピストは感情面のサポートや安心感だけでなく潜在的な対処法も提供してくれると里親は考えていた。セラピストは、里親支援ソーシャルワーカーよりも時間的な余裕があることが多く、時間外に里親と話したり、必要に応じて委託先にも赴くなど、里親に対して応答的であった。

...彼女はしばしば「どう感じているか私に話してみて」と言ってくれて、それが私にとってとても助けになり、私は... することができました。私は専門家になる必要はありませんでした。私は彼女に「ただ怖いと感じている」と言うだけでよかった。すると彼女は、状況に応じた対処法を教えてくださいました (里親)

セラピストは、チームが若者の精神的苦痛とそれに伴う行動について互いに理解を深めるのを助けるだけでなく、チームの特定のメンバーに特定の問題への対処法を助言する役割も担っていた。このおかげで、チームは個人々のニーズにも合った一貫性のある方法で若者に関わることができた。

... [セラピスト] は私を導くことができるので、私は彼に [若者] と関わる様々な場面で様々な支援を頼みました... 彼女はたくさん嘘をつき、サポートワーカーである私にはあることを言い、里親にもあることを言ったのですが、私たちは一緒になって、セラピストが私たちに、なぜ彼女がそのようなことをするのか教えてくださいました (サポートワーカー)

ここでも、セラピストの役割の重要性が認識されたことが、セラピストが関与していない他の少数の委託に影響を与えている。

里親への支援：里親は十分に支援されていると感じており、そのおかげで、通常の委託では対処できなかったかもしれない委託に対処することができた。

そのニーズは、私たちには管理できないほどとても大きなものだったと思います。私たちと [若者] だけだったら、私たちは苦勞しただろうと思います。その支援が本当に大きな違いをもたらしました (里親)

私は素晴らしい支援を受けました... 支援がなかったら、私はこんなに長くは続けられなかったと思います (里親)

何人かの里親は、最初は支援が多すぎると感じていたが、すぐにその価値を認めるようになった。

私は当初、そんなに多くの支援は必要ないと思っていました... 時間が経つにつれ、特にこの特別な委託においては、支援なしでは対処できないと気づきました。この種の委託では支援は必須であり、絶対に必要です... (里親)

提供されているレベルの支援を本当に必要としていない里親は、彼らが例えばスーパーヴィジョンの頻度を減らすことに同意していても、必要な場合にはすぐに支援が提供されるといった柔軟性と情報を評価した。しかしながら、里親の中には、支援を減らしていく設定が自分に合わないと感じ、特定の児童のニーズに合った最も集中的な支援を受けたいと望む人たちもいた。

支援は個人やチーム全体で提供され、里親はチームの一員であると感じていた。安心感を与える周りからの言葉、「気を晴らす」機会、すぐに利用できる支援と助言は、一貫した養育環境と重要な安定性を彼らが提供する手助けとなった。安心感を与える言葉は、委託を中断することになるかもしれないという一部の里親の「パニック」を和らげた。

共有された解決策による専門家の協働

会議の役割

進捗会議は通常、委託にとって重要あるいは「基本的なこと」とみなされていたが、全ての見解が前向きなものだったわけではない。会議の使われ方は委託によって大きく異なっていた。進捗会議は、少なくとも、情報を蓄積し、「ジグゾーパズルを完成させ」、関係者が互いに争うよう若者が仕向けるチャンスを最小限に抑え、里親が「重荷を下ろして」安心する言葉をかけられる機会を提供した。それ以上のことをしていない事例もあれば、もっと積極的な活動をして肯定的な成果に結びつけることができたケースもあった。このことは、2つの事例で説明されている。

進捗会議の認識及び活用の例

事例1： 会議時間はかなり長く、「私たちは、何が起きているか、どのような支援が必要かを話し合うだけ」だと説明された。

会議は役立っているかという質問に対し、里親は「そう思う。主に胸の内を明かすことができるから」と答えた。

児童ソーシャルワーカーは、会議が長引き、何の成果もないと感じていた。

彼らは情報を共有しているだけだった。明確なねらい、目的、タスクと成果があるのかが私にはわかりません...他の専門家については、彼らのタスクが[若者]のために何をしようとしているのか、はっきりしませんでした

事例2： 児童ソーシャルワーカーは、全員がよくコミュニケーションをとっていると感じていた。チームメンバーたちは、若者のレジリエンスを高める方法を一緒に考えていたと報告した。彼らは、戦略と、その中での各自の役割に合意した。

セラピストは、他のチームメンバーが特定の行動の原因を理解するのを助けた。

セラピストとソーシャルワーカーはサポートワーカーに対し、特定の問題に対処する方法と、社会的交流と友人づくりの点で若者を成長させる方法について助言した。

専門家は会議の中で、学校が若者をよりよく理解し、彼女をより公平に扱い対応する最善の方法を話し合った。その児童のソーシャルワーカーは、これは通常、彼女だけの役割であること、それに対するサポートにどれだけ感謝しているかを説明した。

その若者は、様々な活動を通してスキルと自信を身につけ、そのチーム全員との関係を築いていったとみられる。

自傷行為の減少もみられた。

45週目のインタビューで、若者は、学校の勉強が得意だと述べ、1年前の自分なら、そんなことは言わなかっただろうと述べた。

進捗会議の使われ方は、ある程度、若者が抱える困難の度合いに応じたものであった。しかしながら、いくつかの委託での会議の使われ方は、他の委託における会議（物事が上手くいっている時は話し合ったり行ったりすることがあまりないという意見がある場合）でも、よい時期にもっと積極的に取り組むことの検討や、難局やより困難な時期への対応策の検討を行えることを、明確に示唆している。

進捗会議と協働の実用性

いくつかの委託では、関わる人が多すぎて、若者が混乱したり、全員が最新情報を共有するのが難しくなることなどが懸念された。数件の委託では、里親に困難を引き起こす若者の特定の問題にどう取り組むかについて様々な意見があがった。専門家が最良の協働をしていると思われる委託は、こうした懸念が明確なリーダーシップと目標の明確化によって軽減されると示唆している。(心理治療的な委託として、セラピストが会議を主導するものだと考えられている委託もあれば、専門家がリーダーシップを共有していたり、誰が主導すべきか明確でない委託もあった。)

自治体のソーシャルワーカーが頻繁に変わり、彼らが進捗会議や委託におけるその他の局面に十分に関与していないことへの懸念は引き続きあった。しかし、児童ソーシャルワーカーがチームに効果的に貢献しているという非常に前向きな報告もあった。バーミンガムから委託先までの距離は要因ではないようで、「長距離」の委託により、4～6週に1回の訪問をソーシャルワーカーがより熱心に行うようになったように思われた。ソーシャルワーカーと子どもとの付き合いが長い場合、委託先でいつ問題が起きるかを予測し、チームがそれに備えることができるという点で、特に有益であると考えられた。また、彼らはポジティブな変化を見極めるのに最適な立場にあり、チームはその変化について若者を褒めることができた。子どもの家族をよく知っていることも、子どもが自分の感情と気持ちを整理できるようチームが援助する上で有益であった。

委託期間中に引継ぎを受けたソーシャルワーカーは、ステップダウンと自身の役割について必ずしも常に認識しているわけではなかった。新しいソーシャルワーカーは、まずは若者を知ること集中しなければならないと感じ、ライフストーリーワークといった直接的な作業を始めるのに必要な関係を築かなかつたため、このことが遅れの原因になることもあった。

若者の支援

支援のレベル

インタビューを受けた全員が、若者は十分に支援されていると感じており、欠けている支援があると指摘する人はいませんでした。チームメンバーが互いに積極的に活動していた委託では、それが若者のニーズを理解し対応するのに役立っていると感じていた。

関わる全ての専門家が彼女を様々な場面で見ているので、私たちは互いに彼女を助ける方法を学ぶことができる...私は家族療法士 (family therapist) から学んだが、メンターからも、彼女が特定の状況にどのように対応し、何が彼女を怒らせ、何が彼女を助けるのかを学んだ... (児童ソーシャルワーカー)

何人かの自治体のソーシャルワーカーは、若者を取り巻く支援のレベルの高さが、若者が過ちを犯すのをいかに許容し「正しい」判断を支えているかを説明した。

安全で一貫した安心できる環境の確立

委託は、明らかに、安定性と安全で一貫性のある環境を提供していると感じられた。自治体のソーシャルワーカーは、ステップダウンの委託期間は、何人かの若者にとって、それまでのどの委託よりも長かったと述べた。これは、良好な人間関係による (マッチングの良さを示唆している) ところもありますが、おそらく最も重要なのは、里親が若者を見放すつもりはないと意思表示できるだけのチームの支援があったことである。

...たとえ [若者] がそれを妨害しようとしていても、私が言っているのは、ここがとても良いところだということです... [里親] は岩のように立っていて...ほら、私はあなたがしようとしていることが分かっていますよ、私はまだここにいる、あなたをサポートします、あなたが私に何をしようとしても上手いきませんよ、なぜなら私は、まだあなたを助けるためにここにいるのですから、とね。(児童ソーシャルワーカー)

若者は皆、委託先で楽しかったと述べた。そこで暮らして一番良かったことは何かと尋ねると、次のような返事が含まれていた。

全部...本当によかった。

それから

わからない。そこで暮らして一番良かったのは、そこで暮らしたことです。

若者の中には、すぐに里親と絆を結び、瞬く間に落ち着いた者もいたと報告された。他の事例では、より時間を要したものの、45週目に委託されていた若者は皆、上手く落ち着いたと報告された。

若者のレジリエンスの構築

いくつかの委託では、チームは若者のレジリエンスを高めるために協働していた。他の委託では、そのような活動は、里親と、メンターまたはサポートワーカーに任されており、チームペアレンティングアプローチと明確な関係があるわけではなかった。より幅広いチーム編成とチーム会議が影響力をもっていた可能性があるが、里親はこれが若者のレジリエンスに影響を与えたとは考えておらず、里親支援ソーシャルワーカーもその貢献を十分に報告しなかった可能性がある。

里親が若者の精神的なウェルビーイングに貢献していると思われる主な方法は、家族の一員として受け入れられていると感じさせ、彼らに時間を与え、注意を払うことだった。このようにして良い関係を築くことは、若者が委託に傾倒することにつながった。

施設にいた時のことを言うと、私は自分のことで精一杯でした。学校では毎日悪いことばかりしていました。でもここでは頑張っています。[里親]のために頑張るんです(若者)

積極的な活動への参加は、里親家族と一緒にのものでもサポートワーカーと一緒にのものでも、若者が成功し、その成果を他人に認めてもらう機会となるため、自尊心の向上に強く結びついた。

彼女は指導に耳を傾けてそれに従い、それからそれを褒められるようになり、背筋を伸ばして考え、馬から降りてゆったりと歩きます。それは本当に彼女の自尊心は育てていて...私たちは定着の段階にいます...彼女の自尊心を高めてくれるため、私たちはこの乗馬を続けることを選びました(サポートワーカー)

若者がより幸せそうだと説明される場合、これは時として、彼らが話すことのできる様々な人々がいるという事実と関連していた。同様に、本プログラムが上手く機能している理由の一つは、若者が、自分の周りには自分を気にかけて成功を願っているチームのみんながいることに気づいているからだという意見もあった。

サポートワーカーとメンターは、若者に直接働きかけ、自分の生活により前向きな影響を与えてくれそうな友人を選ぶ手助けや、友情関係を維持する方法を理解する手助けをした。彼らは、様々な社会的場面における適切な行動について若者と話し合い、その結果としての進歩を報告した。こうした変化は自尊心の向上にもつながった。

教育と学校

ステップダウン委託に移る際、半数以上の若者が転校したが、その影響についての全体像はわかっていない。転校が新たなスタートになることを期待した若者(とその周囲のチーム)もいたが、実際には以前と同じ困難がすぐに明らかになった。いくつかの事例では、若者にとって「適切な学校」に現在いると思われ、転校がプラスに働いた。転校しなかった場合は、学校までの道のりが長いこと、近くに住む学校の友人がいないことが問題となった。

学校は多くの若者にとって難しい問題であった。いくつかの委託では、チームが上手く働きかけ、若者の学校への参加を促し、出席しなければならない場所だと捉えるのではなく若者が教育の価値を理解できるよう支援することができた。そのような若者の一人は、45週目のインタビューで、学校は去年よりも「ずっといい」、学校がもっと好きになった、「今行動し始めないと、最終的に仕事に就けないとわかっているから」と調査員に話した。

ほとんどの事例で、学校職員は委託に協力的で、里親とのコミュニケーションに長けているとみられた。学校職員は、常に進捗会議に参加したわけではなかったが、参加した時は、若者を全体的に理解する上で「ジグソーパズルの別のピースを提供してくれた」ので非常に役に立つと考えられていた。このことは、若者が学校と家庭で全く違う行動をとっている委託で特に重要であった。学校職員にとってはセラピストに会う機会も有益だとみられた。学校から誰かが出席できるよう、進捗会議が学校で開かれる委託もあった。

若者が学校に行かない場合は、サポートスタッフが関わっていたとしても、長時間拘束されることになった。このことがいくつかの委託中断の原因になったと考えられた。

教育調整担当者（Education Liaison Officer）の役割については、インタビューの結果、様々な見解が示された。このことは、意図的な柔軟性や、明確にする価値がありそうなそれぞれの役割の不確かさを反映したようである。教育調整担当者が委託に関わる場合、彼らは、適切な教育方法をみつける手助けをし、サポートを受け又は試験を受け、あるいは適切なレベルの課題が確実に与えられる若者の権利を主張した。

1年目の目標が本プログラムに与える影響

2016年12月の初め、52週目にプログラムを終了した若者のうち、プログラムが終了となった里親の元にまだ残っていた者は半数以下だった。こうした委託のうちいくつかには、45週目のインタビューで脆弱さがみられたが、それ以外ではこの段階で高い安定性が報告され、委託が永続的になりうることが示唆された。

この委託減少割合は52週という目標に問題があったことを示唆している。表面上は、この委託中断の（内的な又は外的な）理由は全て異なるが、その年が経過して以後の委託継続に影響を与えたであろう根本的な要因がいくつか指摘された。

- 里親が支援を失うことを懸念している。実際にはほとんどの事例において、一連の支援の継続が交渉されていたようだが、このことへの里親の懸念が、委託を続けるために必要と認められる彼らの能力に影響を及ぼす可能性がある。これが事実なら、もっと早い段階で継続的な支援に合意すべきだという主張が支持される。

...最初の1年が過ぎるとその人たちは去ってしまうけれど、1年では全く時間が足りません。
[若者]にとって、どんな子どもと家族にとっても、互いを知り、何が上手く行き何が上手くいかないかを理解するためには1年はかかります。[若者]は以前は多くのセラピーを受ける準備ができていませんでしたが、今は準備ができています。（里親）

- とても挑戦的な行動をとる若者を養育する難しさは1年の間ではさほど減らない可能性があり、里親は安い手当でこれを続けようとは思わないかもしれないことが示唆されており、これは特に、複数の委託を認められている里親が、ステップダウンによる委託と同時にもう1人の児童を里親養育できると感じるか否かに関連していた。（しかしながら、これをとても喜んでしようとする里親もいた。）
- 委託開始から1年あたりでの中断はアタッチメントの問題に関係しているかもしれないという指摘が、特に児童ソーシャルワーカーから寄せられた。この時期、若者はより挑戦的な行動をみせる可能性があり、それは、彼らがより心地良さを感じている、あるいは彼らがセラピー又はライフストーリーワークと対面している時期であるからである。

彼はより挑発的になったと思います。彼は試しています。彼は限界を試して...彼は成長しています...彼は家族の一員になりつつあり、その家族に溶け込んでいます。だから、そう、私にとって、それは自然な行動です（45週目のインタビューで、児童ソーシャルワーカー）

- 多くの委託において、インタビューを受けた者は、ステップダウンの支援がなければ、委託が実際に続いたようには（あるいは今までのようには）続かなかっただろうと述べた。そのような事例では、52週目での又はそのすぐ後での委託中断は良い成果と考えられるかもしれない。

中断された委託からの学び

本プログラムの2年目に4件の委託が中断された。それぞれの委託が中断された「主な」理由は、個々の委託に固有のものであり、ステップダウン・プログラム自体とは関係がない。以下はその一部である。

- 若者が彼ら自身の目的（バーミンガム地域に戻ることをもっていたことと、里親が若者の安全を確保できないような行動をとるのに関係するような社会的養護システムでの以前の知り合いに会うことが重なったこと。
- 里親委託を「試したい」と言っただけの若者に対し、自治体のソーシャルワーカーが居住施設の枠を確保し続けたこと。（里親支援ソーシャルワーカーは、このことが若者にコントロールする力を与えたと認める一方、このことが最終的に委託中断を引き起こしたとも感じていた。）
- 居住施設に付設された学校に若者が通い続け、居住施設の近くに委託されたことで、学校でも社会的にも施設の仲間との交流が維持されたこと。最終的に、若者が居住施設へ戻ることを望んだ。
- 実家族と一緒にいることだけを望んでいた若者もいた。全体的な意見としては、家族、そして若者と家族の関係（例えば家族に頻繁に電話をかけるなど）によって委託が妨げられたというものであった。ここでも、委託の終盤に向けて、若者は居住施設に戻ることを望んだ。
- 複雑で挑戦的な行動があるけれどもステップダウンの機会を望んでしまったある若者は、実際には委託を維持するような行動をとることができなかった。（これは、ステップダウンのように時間を定めた目標のあるプログラムにおいて問題となる。—この若者は、おそらく目標を達成できそうになかったにもかかわらず、部分的に利益を得る機会を提供された。）

特定された「主な」中断理由以外にも、多くの潜在的要因が認められる。

ステップダウンプログラムへの若者の適性確保

- ステップダウンがソーシャルワーカーの発案であったある事例では、ソーシャルワーカーは、居住施設にいる間に若者の行動が落ち着いてきたと感じたが、施設の職員は、その若者はまだ移る準備ができていないと感じていた。里親は、委託時点において委託への若者の実際的関与がないことを懸念していた。
- 居住施設は若者の行動を制御しているため、彼らが里親養育に移る準備ができているように見えても、彼らは自分の行動を制御することを学んでいないという指摘があった。
- その委託場所が選ばれた主な理由の1つが家族交流を促すことであったある事例では、導入期において、両親はこれ以上の交流は望まないと述べた。里親支援ソーシャルワーカーは、この点において予定された委託が継続されるべきか疑問を抱き、若者が両親の決断をどの程度認識しているかもわからなかった。その委託場所が親子間の橋を築く機会を提供するという主張があったが、これが試みられたことを示唆するものは何もなく、若者が予定外の方法で両親を訪れ、それが不安を引き起こし、その委託における不安定さを招く一因になったとみられている。家族との親密な関係性とそれに伴う忠誠心に関わる問題は、少なくとも2つの事例では里親委託を難しくしたとみられるが、同時に、このようなことは少なくとも1つの成功した委託においてもみられた事実であった。

情報とマッチング

- あるマッチングは、最初の紹介に基づき Core Assets によって合意されたが、里親支援ソーシャルワーカーは、その後得られた情報に照らした場合にこの委託が行われていたかどうかと疑問視した。この委託では、会議に施設の代表は出席しておらず、里親は彼らから口頭での情報は受けとっていなかった。このことは他の委託においても特に重要であると強調されている。

...私たちは出かけて行ってファイルを読んだので、それ [追加の情報] を入手しました... 今後 SIBs の委託でまた働くことがあれば、マッチングの前にそれをするつもりです (里親支援ソーシャルワーカー)

- ある若者は、紹介状が夫婦への委託を求めていたにもかかわらず独身の里親に委託された。これには正当な理由があり、インタビューを受けた人たちも認めているように、全ての条件をみたとすれはありえない。しかし、後にソーシャルワーカーはこれが間違いだったのだろうかと思問し、里親は、家にパートナーがいれば委託が中断される可能性が低かっただろうと感じた。

若者が委託へ移る前に全ての実務者を確実に配置すること

- ある若者にとっては、教育の場がないことやメンターがいないことが要因と考えられた。時間が余っていたことで、委託の中断につながった活動に若者が関わるようになった。こうした問題に取り組む必要性が初期の会議の主な焦点となった。(他のステップダウンプログラムの経験がある) 児童ソーシャルワーカーは、この点が、このプログラムにおいて批判されるべきことだと述べた。

私の場合、全てが整っていることを望みます。彼らが教育の場をもたずに移行するとすれば、私は、それ (委託) を考えないか、あまり心から喜ばないだろうと思います (児童ソーシャルワーカー)

- 2 件の委託では導入段階でメンターが不在で、1 件の委託ではメンターが全く存在しなかった。これは中断された委託に限ったことではないものの、メンターの役割は、幅広い評価の中で、有効であることが確認された。

チーム不在時の問題

- ある委託中断の前の困難な週の途中、セラピストとサポートワーカーは年次休暇中であり、自治体ソーシャルワーカーは退職し後任者が配置されておらず、メンターは 1 人も任命されていなかった。つまり、里親と里親支援ソーシャルワーカー以外の「チーム」は存在しなかった。

その他の意見

- これらの委託のうち 4 件では、ソーシャルワーカーと里親は、若者が退屈して居住施設での活動と楽しみを恋しがっていたとコメントした (しかし、このような意見は、非常に成功した委託においても聞かれた)。
- 全ての里親が、委託中断の際に十分な支援を受けたと感じたが、ある里親は、それに続く追加の支援が得られず、その支援があったら彼女自身や家族は助かっただろうと感じた。そのような支援を受けた人たちはそれがとても有効だと感じた。
- ステップダウンの委託を再び引き受けることを憂鬱に思う里親はいなかったが、ある里親はまずは休息を望み、別のある里親は、さらなる里親養育の経験を積むこと、より多くの訓練を最初に受けることが必要だと感じた。
- インタビューを受けた児童ソーシャルワーカーは、再びステップダウンプログラムを使うだろうと述べている。
- 14 週目のインタビュー後に委託が中断した若者の自治体ソーシャルワーカーは、若者はその委託から恩恵を受けたといまだに感じており、他者との関係において、いくつかの前向きな変化を明らかにした。

結論

インタビューの受け手に選ばれた人たちの本プログラムへの反応は、概してとても前向きなものであった。委託の安定性は平均して高まっており、20件の委託のうち、1件はわずか3か月前に始まったばかりだったが、70%が安定性を保っていた。若者たちは、前の施設措置に置いて参加していたものよりも、はるかに高いレベルの活動に携わっている。本プログラムは、個別化された支援を若者に提供し、里親をよく支援し、よって、インタビューを受けた人たちが標準的な委託では上手くいかなかったであろうと思った委託が維持されたと考えられた。「書類上」「委託が難しい」とみられる若者がステップダウンプログラムを通じて委託されている可能性もある。若者たちが、段階的に里親と合い委託に移行することにどれだけ前向きな姿勢であったかは、里親養育サービス一般への強いメッセージとなっている。

提言

計画段階中

- 紹介が速やかに行われるよう、初期段階で自治体の関係者がいつでも委託に同意できる状態にあることが極めて重要である。
- 計画段階において口頭で情報を伝える機会を設け、若者と会う前に里親が入手可能な情報を全て得られるようにするべきである。
- 委託開始前に、全ての実用的な詳細（例えば、通学手段とパスポート取得）が確実に合意され、実現されるようにするべきである。
- メンターやサポートワーカーが不要だという要望は慎重に考え、これらの役割の潜在的な有用性を、措置をとったソーシャルワーカーが確実に認識できるようにするべきである。メンターやソーシャルワーカーがいないことに当初の合意がある場合、これは後日見直すことができる。

委託中

- ステップダウンプログラム中に委託先の移動がある場合、新たな里親が本プログラムについて十分な情報を与えられるようにするべきである。
- ステップダウンプログラム期間中に児童ソーシャルワーカーの交代があるときは、新たなソーシャルワーカーが本プログラムの情報をよく知ることができるようにするべきである。
- 新たに承認された里親が訓練を実践に移せるよう支援し続け、彼らのAttuneグループへの出席を勧め、そして、支援を求めることができると彼らが十分に感じられるようにするべきである。
- メンターの役割について、特に進捗会議への関わりにおいて、関与する全ての専門家の間で一貫した理解が確実に得られるようにするべきである。
- メンターが受けるスーパービジョンについて、メンターがプログラムの管理者にフィードバックする機会を設けるべきである。
- どうすれば学校がデータ収集にも支援提供にもより多く携わるようになるかについて検討されるべきである。
- 若者が不在のときに彼らの見解が提示される方法を含め、進捗会議での若者の関与について明確な指針が必要とされる。
- 特に委託が順調に進行している時は、チームは、進捗会議をより積極的に活用できるかどうかを考えるべきである。

委託終了後

- 52週間の委託が終了する前に、その後の継続的な支援パッケージについて合意するべきである。

評価プロセスに関する追加事項

- 評価チームは、チームワークと成果との関連性をより明確に引き出そうとする必要がある。

次の3件の事例調査報告は、参加する若者と合意した匿名という倫理上の条件をみたすため、異なる個々人のデータを組み合わせている。

事例研究：若者 1

略歴

若者 1 は、委託時 13 歳であった。彼女はステップダウンプログラム参加前に約 6 か月間、居住施設にいた。彼女は以前、何回か里親委託されていたことがあるが、当時、彼女に適した里親がいなかったことを主な理由として居住施設に入所していた。彼女はかなり問題のある行動を示したが、他の若者が「悪い行動をして」自分に影響を及ぼしていると述べ、そこに居場所がないと感じていた。彼女の普段の行動は非常に挑発的であったが、彼女の主な困難は教育面にあり、仲間との関係を維持するのに苦労し、その結果、学校での生活に支障をきたしていた。

マッチングと里親養育への移行

この若者は、複数の里親から受入れの申し出があり、両者を訪問して選択することができた。その後、導入期には、計画について相談されたというよりも知らされたと彼女は感じた。彼女は、このことを訴え、彼女が変更を望む計画は全て、変更の機会が与えられた。

この若者と里親は、初めて会った時に「気が合う」と感じ、全員がこのマッチングに非常に満足していた。その里親は経験豊富で、ステップダウンプログラムと自身の役割を熟知していた。

委託

若者 1 は、1 年強、彼女の委託にとどまり、それから Core Assets による別の委託に移行した。

チームペアレンティング

45 週目までに、3 人の自治体ソーシャルワーカーが彼女を担当した。2 人目のソーシャルワーカーはほとんど委託に関与せず、進捗会議にも滅多に参加しなかった。彼女と連絡をとるのは困難で、提示された日程のいずれにも彼女は都合をつけられなかった。里親支援ソーシャルワーカーは、ついには彼女以外の者が都合のつく日程だけで日にちを決めることとし、その自治体ソーシャルワーカーは参加するか謝罪メッセージを送ることができた。里親支援ソーシャルワーカーは、この件は今後の委託にとって学習ポイントになったと述べた。

進捗会議に出席しないにもかかわらず、このソーシャルワーカーは、例えば若者が友人宅に滞在できるか否かなどの決定を行っていた。里親支援ソーシャルワーカーも里親も、この児童ソーシャルワーカーがあまりにも厳格で、里親の決断能力を過小評価していると感じた。このソーシャルワーカーが本プログラムについて真の理解をしていないと、彼らは感じていた。

若者 1 は進捗会議に参加したが、彼女の（3 人目の）ソーシャルワーカーは、この会議が彼女にとってとても生産的なものだとは思っておらず、恋愛関係や安全な性行為の話を含め、彼女に対して質問を畳みかける専門家があまりにも多くいたと述べた。

教育

若者 1 にとって、学校は一貫して最も困難の多い場所だった。彼女は、仲間との関係を維持するという点では 1 年を通じてあまり進展がなかったが、学業面ではいくつかの成果を上げ、最も重要なのは、彼女が将来について考え、さらなる学習の計画を立て始めたことである。

感情面のニーズ

感情面のニーズをみだし、里親が自傷行為に対処できるよう十分に備えるという点で、チームは上手く協働した。いくつかの進捗が確認されたが、これは若者が実家族から受ける動揺により妨げられた。若者 1 は、委託の中で落ち着きをより感じ、とても安全で安心できると感じたことを明かしてくれた。感情面のウェルビーイングの進展が確認された一方で、1 年は短く、その年の多くが若者のための安定性を築き上げることに費やされたという認識もあった。

里親への支援

里親は、ソーシャルワーカー、セラピスト、メンター、及びサポートワーカーから十分な支援を受けていると感じていた。メンターは、若者に働きかけるだけでなく、里親にとっての相談役も担った。

まとめ

これは成功した委託の例であり、若者は話を聴いてもらえたと感じ、経験豊富な里親は、特に学校で仲間と一緒にの非常に挑発的な行動に対処することができた。「弱いつぎめ」は自治体のソーシャルワーカーであり、これがいくつかの緊張と実務的な困難を引き起こしたが、他のチームメンバーはこれに対処し、この委託の成功を確実なものにすることができた。

事例研究：若者 2

略歴

若者 2 は、委託時 12 歳であった。彼のソーシャルワーカーによると、彼がとても複雑なニーズを持ち、以前にも複数の措置中断を経験した。当初は、数年間委託されていた里親養育の中断後に短期間の措置を行う目的で居住施設に措置されたが、その施設には約 1 年間、入所していた。

マッチングと里親養育への移行

里親は新規承認された者であり、これが初めての委託であった。彼らの評価員は、フォーム F によるアセスメントの間、居住施設からの子どもの委託について彼らと話し合い、里親は、追加的な十分な支援があるという理由から本プログラムに興味を示した。2 人の若者が委託対象として検討され、里親支援ソーシャルワーカーは、両者の紹介状を里親に共有し、彼らの質問への回答に必要なあらゆる追加情報を得た。里親支援ソーシャルワーカーは、新たに承認されたばかりとはいえ、その里親にはとても関連のある人生経験と職歴があると感じ、その里親は「協働しやすかった」ため、導入期はとてもスムーズに進んだと感じていた。

委託

若者 2 のステップダウンは終了し、彼は里親の元にとどまっている。

里親支援ソーシャルワーカーは、このように新規承認された里親たちは多くの研修や Attune（同調）グループ、里親サポートグループに参加したため、よく対処できていたと感じた。この里親は、訓練中に聞きたいいくつかの困難例に比べて自分たちの委託は「幸運だった」と感じており、研修と Attune（同調）グループがいかにも有益であったかや、考える対処法を他の里親と話し合う機会を得たことを語った。

チームペアレンティング

チームは上手く協働したが、会議や面談を主に情報共有の場とみなしており、積極的に計画を立てるといよりは、現在の問題に反応しているようだった。例えば、14 週目と 45 週目の両方の面談において、ライフストーリーワークが差し迫っていることが報告された。若者 2 には（自治体の要請によって）メンターやサポートワーカーが配置されなかったため、彼の意見がどのように代弁されているのかが明確でなかった。里親は、彼が家族以外の誰かと話す機会を失っていると感じていた。

教育

この若者にとっての主な困難の 1 つは、学校への交通手段が委託前に手配されていなかったことだった。この若者は通学にタクシーを使ったが、この交通費を誰が支払うか全く同意されていなかった。何か月もの間、里親がその費用を払ったが、ステップダウン委託のために受け取る追加収入が事実上否定されたと感じ、里親は憤っていた。最終的に、里親が交通費の一部を負担するという合意に達したが、措置担当ソーシャルワーカーは、そのような事柄は委託の段階で確実に解消されているようにするべきだという教訓を得たと述べた。

学校が委託に協力的で、里親とのコミュニケーションは上手くいっていた。教師たちは里親支援ソーシャルワーカーに、若者が宿題を期限どおりに提出していると知らせてくれた。これは若者が居住施設にいるときにはなかったことだった。また、居住施設からステップダウン委託への移動が学校での行動や成績に悪影響なくスムーズに行われたと学校職員が言っていたことを、児童ソーシャルワーカーは報告した。当初、学校はタイミングが合わずに進捗会議に出席できなかったが、チームは会議を放課後に移し、一部の会議は学校職員が出席できるよう学校で開催された。

感情面のニーズ

若者2は、居住施設にいた時は衛生面に関心がなく、委託に移った当初はシャワーを浴びたがらず、服も着替えなかった。里親は、このことにとっても懸命に取り組み、14週目のインタビューで進展が報告され、45週目までにさらなる進展が報告された。

若者2は、特に仲間関係の面でセラピストの支援を受けている。専門家たちは、セラピストに会うという提案を若者が受け入れないかもしれないと感じ、セラピストが家に来て里親に会い、里親と若者と一緒に「お茶をする」というように段階的にセラピストを紹介したため、それが提案された時までに、若者はセラピストのことを知り、会うのを喜ぶようになっていた。

里親への支援

里親は、初めはセラピストからの支援の必要性を感じていなかったが、数週間のうちに、委託について相談できる相手がいてとても安心してしていると報告した。

里親は、自分の経験不足に関連するいくつかの問題を認識していた。特に、起こりうる結果を考えずに若者に遊ばせておくことに対して神経質であると認識していた。Attune（同調）グループに参加したことで、自身の気質とは対照的に、すぐに「全てを解決」することはできないことに気づくことができた。

彼女はまた、若者と実親の交流を調整するようソーシャルワーカーに連絡をとって促そうとはなかなかしなかった。そうすることを約束した際、彼女はそれが自分の役割ではないと感じていたからだ。もっと経験を積んでいれば、彼女は若者のために意見を主張することにもっと積極的であったかもしれない。

まとめ

この事例は、ステップダウンプログラムの一環として養育を担う新規の里親にとって、潜在的な困難と強みを示している。この事例では、もっと経験豊富な里親であれば生じなかったかもしれないいくつかの問題はあったものの、この里親にはとても関連のある人生経験があり、委託は成功した。この委託は、里親支援ソーシャルワーカーとセラピストによって非常に上手くサポートされたが、メンターやサポートワーカーが任命されていれば手助けできたかもしれない問題があった。

事例研究：若者3

略歴

若者3は、委託時15歳であった。彼女は、とても幼い時から社会的養護の下にあり、非常に挑発的な行動をとる複雑な性格をもち、児童性的搾取（child sexual exploitation、CSE）の被害にあうリスクがあると言われていた。彼女の家族はバーミンガム児童サービス局（Children's Services）によく知られており、彼女の父親は危険であると説明されていた。

マッチングと里親養育への移行

若者3は、プログラム期間中に3回移動し、45週目のインタビュー時には4人目の里親の元にいた。彼女にとって最初の委託は相性が良かったように見えた。彼女は、ティーンエイジャーの養育経験が何回かある里親に委託され、それは彼女が望んだ場所であった。また、その委託先には他の児童がおらず、施設環境では注意を引き付けるのに苦悩していた彼女にとって重要だと考えられた委託であった。彼女は計画段階に全面的に関与し、移る準備ができていた。この後の移動は全て急に決まったものであり、次の里親の元に移る前に若者がその里親と会う機会はなかった。

委託

最初の委託は2～3か月は上手くいったが、その後若者3は限界を超えて委託から離れ始め、やがて里親は、彼女の安全を守れないと感じるまでになった。自治体ソーシャルワーカーは、この委託に提供された支援のレベルを称賛したが、里親の経験と、若者を制止しその行動を管理するスキルについて疑問を呈した。彼女は、何が起こりえたか誰にもわからないと認識する一方で、もっと経験を積んだ里親であれば、より適切にその行動に対処したのではないかと感じていた。それからその若者は、数週間のレスパイト措置を経て、別のステップダウン委託に移った。この時は、委託の場所が主な問題とみられた。この委託は、その若者の家族や以前の友人に近すぎたため、若者は何度も行方不明になり、児童性的搾取（CSE）のリスクが高い状況にあると考えられた。その若者の安全を維持するという理由から、専門家たちが彼女の移動を決定した。若者3は4回目の委託に移され、そこで彼女は上手く落ち着いたようで、彼女の委託は再スタートを切った。

チームペアレンティング

若者3は、4回の里親委託において3人のソーシャルワーカーを経験した。彼らは皆、彼女の委託に関与しチーム会議に出席したが、彼女のことを全体的に認識し、理解している者はいなかった。毎月のチーム会議は、関与する全員にとって非常に有益であると考えられ、そのチームは支援的で十分に協働的であると一貫して報告された。

教育

この若者の教育は、彼女の頻繁な移動によって中断されたが、彼女は学校が好きでもなく、たびたび締め出されていた。最終的に、彼女は、学校に通っていない時に支援してくれるサポートワーカーと関係を築いたが、これは難しいもので、彼女は始めサポートワーカーと手を携えるのを完全に拒否していた。インタビュー時点で、若者3は新しい代替の教育機関にちょうど通い始めたところであった。彼女は、そこでは他の若者と友達になれないだろうと感じ、やや不安だったが、自分の勉強が遅れていることを自覚し、出席することに幾分前向きさを示しつつあった。

感情面のニーズ

この若者は、頻繁に委託先から行方不明となり、セラピストや他の専門家との関わりを拒んだため、その感情面のニーズをみたすのは難しかった。インタビューを受けた時、若者は施設養育を離れてから自身が変わったとは全く感じていなかった。しかしながら、里親支援ソーシャルワーカーは、彼女と3人目の里親が、分かち合ったユーモアセンスをベースに良い関係を築き、その里親に信頼を寄せ始めたと感じていた。どちらのソーシャルワーカー（里親支援ソーシャルワーカー、自治体の児童ソーシャルワーカー）とも、若者3は、多くの移動にもかかわらず、より幸せになり、よりリラックスしてきているように感じた。

里親への支援

1人目と3人目の里親は十分な支援を受けたと感じた。(2人目はレスパイト里親でありインタビューされず、4人目の里親はまだインタビューが実施されていない。)

まとめ

この事例は、より多くの困難さが判明した事例であり、それには多くの要因が考えられる。しかしながら、非常に複雑な困難さと行動をもつと認識されたこの若者は、最初の委託から17か月後もまだステップダウンプログラム中にあり、高いレベルのチームワークがその重要な要因となっているようである。この事例は、若者を児童性的搾取(CSE)から安全に守ることがいかに難しいかを物語っている。若者3は、家族や以前連絡をとっていた人が住む地域内の場所と、その地域から離れた場所の両方に委託されたが、どちら委託も彼女を完全に守ることはできなかった。

早稲田大学大学院総合研究機構
社会的養育研究所
監訳チーム
担当：福井 充（福岡市こども家庭課）
2022（令和4）年2月

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION